

一 多有田宅の事

仰せに云はく、田宅とは長者の財宝なり。所詮田と云ふは命なり、宅と云ふは身なり。文句の五に、田宅をば身命と釈せり。田は米なり、米は命を續ぐ。宅は身を宿す、是は家なり。身命の二を安穩にするより外に財宝は無きなり。法門に約すれば、田は定、宅は慧なり。仍って定は田地の如し、慧は万法の如し。我等が一心の田地より諸法の万法は起これり。法華一部方寸に知んぬべしと釈して、八年の法華経も一心が三千と開きたるなり。所詮田は定なれば妙の徳、宅は慧なれば法の徳、又本迹両門なり、止観の二法なり。教主釈尊本迹両門の田宅を以て一切衆生を助け玉へり。田宅は我等衆生の色心の二法なり。法華経に値ひ奉りて南無妙法蓮華経と唱へ奉る時、煩惱即菩提・生死即涅槃と体達する処は、豈多有田宅の長者に非ずや。多有と云ふ意は心法に具足する心数、色法に具足する所作なり。然れば多有田宅の文は一念三千の法門なり。其の故は一念は定なり、三千は慧なり。既に釈に云はく「田宅は別譬なり。田は能く命を養ふ。禅定の般若を資くるに譬ふ。宅は身を栖ますべし。実境の智の所託と為るに譬ふ」と。此の釈分明なり。田宅は身命なり。身命は即ち南無妙法蓮華経なり。此の題目を持ち奉る者、豈多有田宅の長者に非ずや。今末法に入りて日蓮等の類多有田宅の本主として如説修行の行者なり云云。